

地域情報（県別）

【茨城】「地域包括ケアで日本は世界をリードする。開業医は推進を」-鈴木邦彦・医療法人博仁会理事長らに聞く◆Vol.3

2020年2月10日(月)配信 m3.com地域版

医療法人「博仁会」理事長の鈴木邦彦氏が2019年11月に開設した「フロイデ水戸メディカルプラザ」。医療と介護だけではなく、地域交流や就労支援といった「生活」の視点まで加わっている点が非常に珍しいが、いきなり始めたことではないという。法人運営の志村大宮病院がある常陸大宮市では既にさまざまな取り組みを行っており、それらを集約・発展させた結果がこの施設だった。理事長の鈴木邦彦氏と施設長の鈴木明廣氏に聞いた。（2019年12月11日インタビュー、計3回連載の3回目）

▼第1回はこちら

▼第2回はこちら

——フロイデ水戸メディカルプラザの機能として非常に珍しいのが、「医療」と「介護」のハイブリッドに留まらず、地域交流や就労支援まで行っているところですか？

鈴木理事長 私は常々、「中小病院は地方と運命共同体」だと言っています。こうした考え方に照らし合わせると、医療と介護のサービスを展開した次に地域の方々の生活に関わっていくことは自然な流れでした。

実は、地域交流などに関する取り組みは既に拠点病院がある常陸大宮市で行っているのです。コミュニティカフェや地域交流スペース、高齢者向けのフィットネスジムを病院の近くでそれぞれ運営していて、ボランティア（フロイデサポーター）制度も既に運用、100人以上の方に登録していただいています。

また、私は医療法人「博仁会」とは別に社会福祉法人「博友会」と学校法人「志村学園」も運営しており、学校法人は茨城北西看護専門学校を運営しています。地域に医療人材を輩出する活動も行っているわけですね。茨城北西看護専門学校は2020年4月に介護福祉学科も開設します。

すなわち、フロイデ水戸メディカルプラザは今までの私たちの取り組みを集約し、発展させたものです。今までは病院以外の施設に医療の機能がありませんでしたから、医療と介護の双方を提供している意味で「発展」と捉えています。



鈴木邦彦理事長（場所はフロイデ水戸堀町デイケアセンター）

——なるほど。培ってきたノウハウがあったからこそ、ここまでの形にできた。在宅医療の専門窓口「フロイデ地域包括ケアセンター水戸」を設けているのも珍しく、市民には分かりやすい仕組みだと思いました。

鈴木理事長 前回もお話ししましたが、病院でできることは限られています。高齢化の進展に伴って最期をご自宅で過ごしたい方への在宅医療の重要性は高まっていますから、専用の窓口があった方が分かりやすいでしょう。

鈴木施設長 地域の方が相談しやすい仕組みは外来でもつくっていて、フロイデ水戸メディカルプラザには地域連携看護師（コミュニティナース）が1人常駐しています。地域連携看護師は医療や介護に関する相談全般に対応してい

て、「在宅医療に関する相談」と決まっていればフロイデ地域包括ケアセンター水戸でいいわけですが、それすらも判断がつかないときは地域連携看護師がまずは対応しています。

当施設の地域連携看護師は過去に地域包括支援センターのセンター長も務めていた人ですから、医療だけではなく介護制度などに関する知識も豊富です。施設内に留まらず、入院患者さんの元などに足を運んでご相談に乗ることもしています。地域連携看護師も医療と介護の枠に留まらない、地域の方の生活に関わっていこうとする仕組みの一つと言えるでしょう。

——鈴木理事長は日本医師会の常任理事を8年にわたって務めました。海外視察にもよく行かれている印象を受けます。これらの経験はフロイデ水戸メディカルプラザの開設に生きたのでしょうか。

鈴木理事長 法人として地域包括ケアシステムの構築を推し進めることは、地域リハビリテーションの理念に沿って以前からやっていたことなので、日医の常任理事を務めたから始めたことではありません。ただ、日医時代にさまざまな人と知り合え、情報交換を図れるようになったことはこれからも生きてくると思います。一方で、常任理事を務めていたときはなかなか地元に戻りませんでしたから、今、これまでやりたくてもやれなかったことを急ピッチで進めている次第です。

海外の医療・介護の状況はなるべく知っておきたいと考え、日医常任理事になる前の2008年から毎年、学者の同行を得て海外訪問調査を行い、報告書を作る活動もしています。これまでにドイツやイギリス、フランス、デンマーク、オランダ、オーストリア、アメリカ、韓国、台湾を訪問しましたが、いずれ日本でも家庭医をどう育てるか議論されるだろうと思い、中でも家庭医療が普及しているドイツ、イギリス、フランスはそれぞれ3回訪問しました。これらは日医に提言しようとして始めた活動でしたが、しばらくして国内でかかりつけ医に関する議論が始まったときに私が日医の担当になったことは、不思議な巡り合わせだと感じました。

こういった活動を通して思うのが、水戸メディカルプラザのような医療と介護が合わさった施設は世界的にも珍しいということです。諸外国は医療と介護の制度が日本よりも分断しており、より連携を取りづらい印象を受けます。日本ではどちらも社会保険制度で運用されているので市民が利用しやすく、医療者として地域包括ケアシステムを推進する意味でも最適な国ではないでしょうか。

私は海外視察を始めた当初、「どこかいいモデルとなる国がないか」と探していたわけですが、結局ありませんでした。それどころか、財源確保の問題は別として、日本の医療と介護のシステムは極めて優れていることが分かりました。サービスが非常にきめ細かい上、患者さんの待ち時間も世界的に見れば短いですし、フェアネスも高い。日本が長く培ってきた国民皆保険や介護保険、地域包括ケアは良いビジネスになるのではないかと私は考えています。これらのシステムを医療機器や介護機器、医薬品などの物品を絡めてセット販売すれば国にとって有数の輸出産業として成長するのではないかと。

——最後に、読者である医療関係者に伝えたいことがあればお聞かせください。

鈴木理事長 一人でも多くの医師に、地域包括ケアシステムの担い手になっていただきたいですね。その上で、地域のかかりつけの先生方には多職種連携のまとめ役になっていただきたいですし、行政と協力しながら地域づくりのキーパーソンに育ってほしいと思います。

そのためにすぐに実践できることは、介護保険サービスに対する理解を深め、外来患者さんの介護相談にも乗ることです。高齢化とともに外来受診をしながら介護サービスを受ける人がかなり増えているので、医師が相談に乗ってくれたら患者さんも喜んでくれることでしょう。あとは、医師会の会員として行政と連携しながら地域包括ケアシステムへの貢献度を高めていくこと。日本医師会が主催しているかかりつけ医機能研修制度を利用するのもいいでしょう。私が事務局長を務める日本地域包括ケア学会も2019年12月22日の第1回を皮切りに定期開催されていきますから、参加していただけたらうれしく思います。

鈴木施設長 地域に根付いた施設に成長していきたいと考えています。病院は病気の疑いがあつたり、病気になったりしたときに「わざわざ行くところ」ですが、フロイデ水戸メディカルプラザは「健院」として、「健康なときからごく自然に行くところ」として機能していきたいですね。地域交流スペースやコミュニティカフェ、ボランティア制度を生かしながらそういった存在にまで施設を高めていけるよう努力していきます。

◆鈴木 邦彦（すずき・くにひこ）氏

1980年秋田大学医学部卒。仙台市立病院、東北大学第三内科、旧国立水戸病院（現国立病院機構水戸医療センター）を経た後、1996年に志村大宮病院院長、1998年には医療法人博仁会理事長に就任。2010年から2018年まで日本医師会常任理事を務めた。

◆鈴木 明廣（すずき・あきひろ）氏

フロイデ水戸メディカルプラザ施設長。介護福祉士とケアマネジャーの資格も持つ。

【取材・文・撮影＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

